Japan Evangelical Lutheran Association

JELA NEWS

JELAニュース　第５号　2004年 11月15日発行　発行責任者　ローウェル・グリテベック

日本福音ルーテル社団　〒150-0013　東京都渋谷区恵比寿1-20-26　Tel.03-3447-1521　Fax.03-3447-1523　jela@jela.or.jp　www.jela.or.jp

難民支援　・　アジア子ども支援　・　ブラジル子ども支援　・　ボランティア派遣　・　奨学金制度　・　宣教師支援

社会に出ていき　手をさしのべる

「お前たちは、わたしが飢えていたときに食べさせ、のどが乾いていたときに飲ませ、
旅をしていたときに宿を貸し、裸のときに着せ、病気のときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれた。」
マタイによる福音書　第25章35～36節

グループ・ワークキャンプ2004　Build to Last（永遠につづくものを建てる）

全米各地とその周辺地域で開催される超教派の催し、グループ・ワークキャンプに今夏も日本から10名の青少年と3名の成人スタッフを派遣しました。一行はコロラド州でのホームステイ、一週間の奉仕キャンプ、400人の米国の若者との賛美集会を体験し、8月10日に無事帰国しました。お祈りを感謝します。参加者の声を4～6ページに掲載いたしました。

なお、来年度の参加者を現在募集中です。申込締切は2005年1月末日です。詳細は、6ページをご覧ください。

この号にはこんな記事が

支援者の皆様へ　事務局長からのごあいさつ　2
宣教師の働き
　ティモシー・メイソン師からのメッセージ　2
難民支援　難民事業本部の支援活動　3
グループ・ワークキャンプ2004
　参加者の声　4-6
　2005年度募集要項　6
ブラジル子ども支援
　漫画とアニメの楽しさをブラジルの子どもたちに　7
　中学生、JELA事務局を訪問　7
お知らせ
　JELA職員募集　8
　新しい郵便振替用紙について　8
　献金者一覧　8
編集後記　8

支援者の皆様へ

JELA事務局長　ローウェル・グリテベック

主イエスの御名により、皆様にごあいさつを申し上げます。

私どもの働きに対する皆様のご支援、お祈りに深く感謝いたします。JELAは助けの必要なさまざまな方々に支援の手をさしのべつつ、前年にも増してその働きを拡大、充実させています。聖霊による導きと皆様からのあたたかいご支援がありますことを覚え、JELAを代表し感謝を申し上げます。

2004年度に展開した事業では、日本福音ルーテル教会（JELC）世界宣教委員会との新たな共同事業が注目されます。JELAとJELCが互いに協力し、両団体が関心を共有する領域に力を合わせて取り組むなら、世界宣教の分野でこれまで以上に素晴らしい働きができるという共通理解がありました。その最近の成果が、

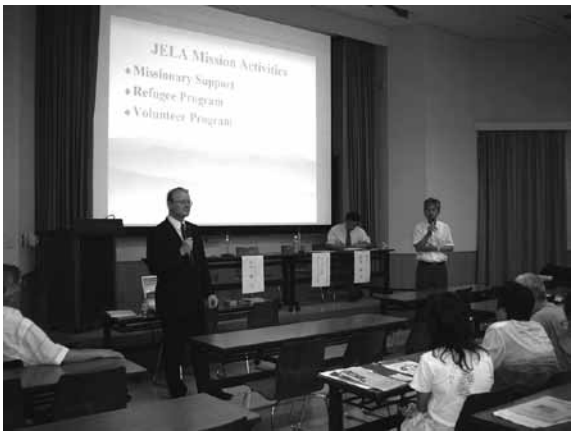
ミャンマー・ベツレヘム・ルーテル教会にて

多数のJELCの青少年と牧師等のボランティア派遣事業であり、青年リーダー養成訓練の実施、メコンプロジェクトの共同支援等です。メコンプロジェクトに関しては、この10月にJELA（グリテベック、中川浩之理事）とJELC（松岡俊一郎事務局長、渡辺純幸世界宣教委員長、浅野直樹世界宣教委員）の共同調査隊がベトナム、カンボジア、ラオス、ミャンマーを視察し、同地域における教会成長と社会支援活動に日本がどのように貢献できるか、検討を加えつつあります。このように日本のルーテル教会は、JELA　と協力することをとおしてイエス様の「あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしなさい」（マタイによる福音書28節19節）という命令に応答し、世界宣教に向けた今まで以上に積極的で着実な歩みを始めました。この大宣教命令は国籍に関わらず、すべてのクリスチャンに向けられたものであることは明らかです。

現在計画を進めていることは、ボランティア派遣プログラムを拡大して、より幅広い年齢層の方々に短期の奉仕の機会を提供することです。一つの試みとして、デビッド・パーソン牧師と徳弘浩隆牧師が中心になり、インドでのワークキャンプを検討中です。これは、毎年十名前後の日本人の成人をインドのジャムケッドに派遣し、身体に障害をもつ現地の方々と一緒になって義足づくり等の奉仕を行うというものです。

今お読みのJELAニュースには、上記以外のJELAの様々な働きを紹介しています。どうか祈りにより、またプログラムに実際に参加することで私たちの働きを支えてください。神様は私たちといつも共にいてくださいます。このことに感謝し、自信をもって前進してまいりましょう。

主にあって



2004年9月23日　一日神学校において

宣教師の働き

ティモシー・メイソン師一家が十数年におよぶ日本での働きを終え、この10月に新任地ハワイに赴任しました。以下は、メイソン師からのメッセージです。

私が日本での奉仕に召された当時、JELAは財政的に疲弊し、大きな組織改革に取り組み始めたところでした。まさに、深く暗い谷を渡る毎日でした。しかし、神様の用意された祝福を得るために、恐らくこの経験が必要だったのだと思います。そしていま、JELAは再び山頂に向かって歩みだしました。

私は長らく日本福音ルーテル教会東海教区で牧会に携わり、ここ数年は名古屋の名東教会の牧師を勤めました。名東教会は英語と日本語で礼拝をする、国際色豊かな教会です。これまでの日本での経験を振り返るとき、とくにJELAの働きを考えるとき、それは単に宣教師の生活を支えるだけでなく、社会に対して様々なことができ、世界に向けて日本の教会が働きを拡大するために大きな協力と貢献ができる組織であると感じています。日本のルーテル教会の人々がブラジル、バングラデシュ、インドに支援の手をさしのべることで、そこに住む多くの人の人生が変えられましたし、こういった国々でボランティアの奉仕をした人々が帰国して、その経験を教会で分かち合うことにより、あちらこちらで新しい息吹がおこりつつあります。

この11月には東京・恵比寿にJELAミッションセンタービルが竣工し、経済的支援やボランティア活動を通じて、さらに多くの人がJELAの働きに加わることが可能となりました。日本の国内外に向けたJELAの活動が拡大するとともに、教会が神の福音を宣べ伝える場所が広がりますし、世界中の多くの人々が様々な新しい方法で神の国を分かち合う働きに参画できるようになります。

米国福音ルーテル教会から派遣され、日本で奉仕できた恵みにとても感謝しています。神様の平安とともに皆さんが前進し、「最も小さい者」（マタイ25：40）に医療的、教育的、肉体的、霊的な支援ができますように。そして、イエス様に対する皆さんの信仰を神様が祝福してくださいますように。世界が神様の光を体験し、それを知ることができるのはイエス様をとおしてだけなのです。アーメン。

ティモシー・メイソン

中川JELA理事より記念品を受けとるメイソン師

難民支援

前号の記事「難民申請者支援におけるNGOと政府の協力」の中で、政府予算による保護費の重要性が指摘されました。今回はJELAと長年の協力関係にあり、保護費支給その他の難民支援活動を展開する難民事業本部の働きを、同本部の寺本信生さんに紹介していただきます。
。

難民事業本部の支援活動

難民事業本部本部事務所援護課長　寺本信生

インドシナ難民と難民事業本部

「難民」といえば、スーダンやコンゴの難民の置かれている状況が時折報道される程度で、一般にはあまり馴染みのある存在ではないのが実情ですが、2年前の中国瀋陽での事件以来、入管法改正と相まって、日本における難民認定や保護を取り巻く環境が徐々に変化している状況は、皆様ご承知のことと思います。又、今から遡ること約30年ほど前から、インドシナ難民と呼ばれる人が多く来日し、日本に定住している事をご記憶の方もいらっしゃるでしょう。

1970年代後半以降、政変と新体制への移行に伴ってインドシナ三国（ベトナム、ラオス、カンボジア）から多数流出したインドシナ難民の内、日本に一時滞在中のベトナム・ボートピープルに対し、日本政府は1978年に定住許可を認める閣議了解を行いました。それ以降、日本におけるインドシナ難民に対する定住許可数は11,200名を越えています（内閣官房作成資料。平成16年8月末現在）。翌79年、難民事業本部は、インドシナ難民の日本での定住促進事業を主な業務として（財）アジア福祉教育財団内に設置され、兵庫県姫路市、神奈川県大和市に設けられた定住促進センター（共に既に閉鎖）において、日本語教育や健康管理、就職斡旋等を行ってまいりました。政情安定化等によりインドシナ三国からの新たな難民流入が無くなった現在は、日本に定住を認められたインドシナ難民が母国から呼び寄せた家族に対する日本語教育などの研修や、定住の為の生活相談を、東京都品川区の国際救援センターと兵庫県神戸市の難民事業本部関西支部で行っております。

難民事業本部の事業と日本福音ルーテル社団との関わり

難民事業本部は95年に外務省の委託により難民認定申請者（以下「申請者」）への援助事業を開始したことから、既に84年から個別難民支援事業を開始されていた日本福音ルーテル社団と協力関係を築かせていただくことになりました。難民事業本部の申請者への援助の内容は、生活に困窮する者に対して生活費や医療費等の支援（「保護費」）を行うというものですが、その対象者の中にはJELAハウスの部屋を提供していただいた方が何人もおります。また、03年に難民事業本部が申請者用緊急宿泊施設を設置した際には、その運営・管理に関して、10年に亘るJELAハウスのノウハウの蓄積を大いに参考にさせていただきました。

同じく03年、条約難民（「出入国管理及び難民認定法」に基づき法務大臣に難民と認定された者）についてもインドシナ難民同様の定住支援（国際救援センターでの日本語教育や生活相談など）が制度化され、難民事業本部も事業の幅を拡げつつあります。

新しい試み

更に今年度からは本部事務所に専用のフリーダイヤルを導入するなどして、インドシナからの定住者のみならず、条約難民や申請者等に対する生活相談や自治体等からの照会への情報提供を開始いたしました。さっそく、仕事や住居、医療、教育等多岐に渡る相談が、多くの地域出身者や自治体等から寄せられています。中でも難しいのは、在留資格が無く、日本の社会保障制度の枠に入らない申請者のケースです。申請者の傾向としては単身の男性が多いのですが、日本にある程度の生活基盤を築いた段階で認定の決定を待たずに妻子を呼び寄せるケースも見られます。保護費の申請や生活相談には夫が申し出てくることが多く、比較的滞日年数の短い妻子は、言葉の問題等から相談員と直に言葉を交わす機会が全く無いことさえあります。しかし、その夫が難民認定申請を却下され、不法滞在者として入国管理局の施設などに収容されると、妻は一家の主としての役割を担わざるを得なくなります。来日後に妊娠・出産する方もあり、相談員は幼い子を抱えて戸惑う若い母親に出会うことがしばしばあります。

夫の収容中に出産を迎えたケースもありました。家庭訪問をすると、出産予定日を既に過ぎ、動くのも辛そうな母親から、「アパートの契約更新時期になったが、更新料と値上がりした家賃を払えず、退去を迫られている。どうしたらよいか分からない」との訴えがありました。ただでさえ不安な異国での出産に加えて、このようなトラブルに直面し、彼女の心労はいかばかりだったでしょうか。本人の希望により、相談員は不動産屋に家賃の分割払いなどの交渉を行いました。

家族の分離は決して望ましいことではありませんが、相談員は今まで夫の口からしか聞かされていなかった妻たちの生活やニーズを、このような機会に目の当たりにすることができました。困難に直面しながらも同国人の女性同士で助け合い、よりしっかりと自分の主張を表現するようになることもあります。特別なケアも必要ですが、彼女たちをただ「弱者」として捉えることが誤りであると感じさせられることがしばしばありました。

おわりに

難民支援を行う上では関係する機関や団体の方々との連携は必要不可欠です。その連携の一環として、私どもも含めた難民支援機関・団体や個々の支援者のキャパシティ向上を目指し、研修の機会なども提供させていただければと考えています。
今後とも日本福音ルーテル社団の皆様と共に、それぞれの特性を生かした支援に努めたいと考えておりますので、よろしくお願いいたします。

グループ・ワークキャンプ2004
― Build to Last（永遠につづくものを建てる）―
参加者の声

自分を見つめなおす
松岡あゆみ（大岡山教会　16歳）

２日目の夜のプログラムでは、神さまへの信仰を確かめるための場所が用意されていました。私はいくつかある中から、砂に手をつけて祈るところへ行きました。そうしたら、涙があふれて止まりませんでした。私の神さまへの信仰って何だろう。なんでここにいるのだろう。私がここにいていいのかなあ。なんでクリスチャンとして成長できないのかなあ。いろんな思いが一気に溢れてきて、みんなの前では泣かないつもりだったのに、泣いてしまいました。夜のユース（＝青年）グループでのディボーション（＝祈りと交わりの会）では、少し落ち着いて話し合うことが出来たので、アメリカでの自分を見つめなおすことが出来ました。私たちは当たり前のようにここにいるけど、ホストファミリーや教会の方々、日本で祈っていくれている両親、牧師先生の協力と神さまのお蔭でここにいるんだ。そのことに気付いたとき、一日一日大切に過ごそうと思いました。

特別に幸せな体験
萩真理子（西東京ユニオン教会　16歳）

毎晩のプログラムではキャンパー全員で体育館に集まり、神様のことを考える時間を持ちました。こんなに大勢の同年代くらいの子たちと神様のことについて考えるという経験はとても特別でした。なんだか私もみんなも同じような悩みを抱えていて、一緒に悩んでいるような気がして、歳も近いしよくわからないけれど不思議にすごく安心感がありました。そのとき神様が私たちにこの機会を与えてくださっているんだと自然に考えていました。そんなふうに考えることをしなくなった私が再びそう考えていることが不思議でした。日本に帰ってきた時はもうくたくたでしたが、すっごくいい体験が出来て、私にとってとてもいい影響を与えてくれた2週間でした。本当に今回参加できて幸せだったと思います。

寄り添うことの大切さ
小林恵理香（大岡山教会　スタッフ）

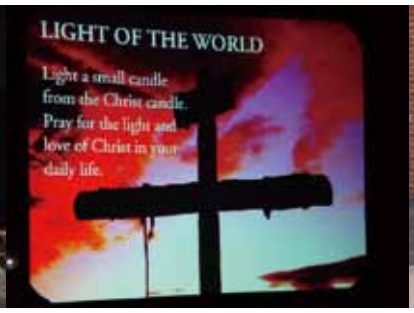
参加者と話をすること、声を掛けること、そして、良さを認めて大胆に褒めること、これがスタッフとして私に出来ることであり、すべきことではないかと思った。そして、驚くことに、日本ではなかなか出来なかったこれらのことが、ワークキャンプの場ではすっと自然に出来たのである。言葉の壁の大きさに打ちひしがれる姿を見るときは、私も辛く、言葉をかけずにはいられなかった。また、「もう、大丈夫。」「すっごく楽しいよ。」という言葉を聞くと、「やったね！」と自分の事の様にうれしかった。ワークサイト（＝奉仕作業の現場）を回るときは、みんながどうしているか気になって、一刻も早く顔を見たかった。飛んでいって、「どう？」と声を掛けたかった。参加者一人一人がすごく近い存在に感じられた。「喜ぶものと共に喜び、泣くものと共に泣きなさい。」という聖書の言葉を思い出した。ワークキャンプの後、日本でこの聖句を主題に青年のプログラムが行われることになっていたので、頭に残っていたのだろう。話をしたり、声を掛けたりすることは、相手に思いを寄せることでもある。相手に寄り添うことで、その人が喜んでいることや泣いていることが分かるのだと思う。

一生心に残るもの
河野紗羅（箱崎教会　15歳）

3日、4日、5日と日を重ねるごとに、私はクルー（＝奉仕作業の仲間）と仲よくなっていきました。日本語と英語をお互いに教えあいこしたりしました。キャンプに来る前はまったく知らなかった作業道具の名前を英語で言えるようになったし、英語で指ずもうなどのゲームもしました。彼らとは日本語であいさつするようになりました。私が彼らの言った英語を理解できなかったときは、ジェスチャーをまじえたり、簡単な英語に直したり、ゆっくり言い直してくれました。はじめの方は、英語がわからなくて、次の日会うのがこわかったけれど、このころには、毎日会うのが楽しみでした。私はいつも、次は何を日本語で教えようかと考えていました。私は彼らのことが大好きだったので、おわかれの日は寂しくて涙が止まりませんでした。最初にキャンプに来て感じた寂しさとはまったくちがう寂しさでした。このキャンプで過ごした日々をふりかえってみると、本当に楽しかったなと思います。このすばらしい経験や思い出は神さまからいただいた大切な贈り物です。一生心の中に残るものになると思います。

＊帰国した沙羅さんの様子について、お母様が次のように知らせてくださいました。

「主の御名を賛美します。この度は大変貴重な体験をさせていただき、ワークキャンプを終えて帰国した娘がひとまわり大きく成長していることに驚きと感謝の気持ちでいっぱいです。帰国するやいなや『来年も必ず参加する！』と、もう一年後のワークキャンプを楽しみにしている娘を見て、誰とでもすぐ友達になれる若者って素晴らしいなと思いました。皆様のお祈り、お支えをありがとうございました。」（河野薫）



奉仕する楽しさ

大和由祈（大岡山教会　15歳）

ワークキャンプ初日、早くも大きな苦しみが私の目の前に現れた。『英語が喋れない』。クルーと対面して、色々とコミュニケーション（＝意思疎通）を取らなければならないのに、英語が出てこない。皆が言っていることも分からない。私は不安になった。こんな所で1週間やっていけるのかと。私はとにかく泣いていた。ホストファミリーの家に帰りたいと思っていた。クルーと過ごす時間が増えるに連れて、コミュニケーションが取れるようになった……わけでは決してなかった。でも毎日着実に一緒にワークをしていて楽しいと思えるようになった。言葉は少なくても一緒にワークを通して神様に奉仕している、それがスゴイことなんじゃないかなと思った。

成長させてくださる神様

大道愛美（西宮教会　18歳）

私は今まで、自分から積極的に動くタイプではありませんでしたが、このキャンプで積極的に動けたことが自信につながりました。できると思えば何でも出来ると感じることが出来たのです。素晴らしい仲間との出会いも、アメリカにいけたことも、自信がついたことも、人とのつながりや愛の大切さを強く感じたことも、全ては神様のお導きであると思いました。神様の愛は、私を成長させてくださる。そして心を癒してくださる。強くそう思いました。

悲しみから喜びに

平岡恵（徳山教会　19歳）

アメリカに行く前、私は大学のことで悩んでいました。友達関係のことで悩み、友達をつくることに億劫になっていました。でも、キャンプに参加して私の悩みは消えました。それは、キャンプ二日目のことです…。二日目から作業がスタートしました。私のレジデント（＝修繕する家の住人）の家は二つのグループが共同してやることになっていました。一つのグループに六人のクルーだから、計十二人で作業します。その十二人の中で日本人は私一人だけ…。何とかとけ込もうとしましたが、英語がわからず一人黙々と作業していました。夜のプログラムでも、周りは楽しそうなのに私は愛想笑いしか出来なくなっていました。毎夜、プログラムの最後にあるスライドショーを見ていた時、我慢していたものが溢れ出してきて涙が止まらなくなりました。隣に別のクルーの子が来て私に「How are you?(元気？)」と声をかけてくれました。私は涙目で「I’m fine.（だいじょうぶ）」と答え、心の中では「大丈夫やないのにアホやなぁ」と思いました。プログラムが終わった後、その場から動けずに泣いていると、一緒に日本から来た友達が駆け寄ってきてくれて、心配してくれて本当に嬉しかった。しばらくすると、同じクルーの人が来て、私が泣いている理由を聞いて私にこう言ってくれました。「英語がわからなかったら何でも聞いて。簡単な英語で話すから。私はいつもそばにいます。いつでもあなたの味方です」と。そして、そばに来て私を抱きしめてくれました。もう一人のクルーも私を抱きしめ同じことを言ってくれました。嬉しくて涙が止まりませんでした。その時、私は一人ではないのだ、と思いました。

＊　＊　＊

感謝への気づき

諸正佳華（天王寺教会　17歳）

最終日のプログラムはレジデントも一緒に過ごすことになりました。私はプログラム中、１週間あった楽しかったことや辛かったことを思い出していました。どの場面も私を成長させてくれる貴重な体験となりました。ふと、レジデントの顔を見たとき「この人たちが家を提供してくれたからこんな貴重な体験ができたんだ。この人たちのおかげで私は、この１週間生かされたんだ。」と気付くことができました。こう感じた瞬間、ここで出会ったすべての人、今まで私を支えてくれた人みんなに感謝の気持ちを持ち、それを伝えたくなりました。

復活による希望

近藤拓　（栄光教会　14歳）

今年のキャンプは、自分が２回目ということもあって、それほど緊張というものはなく、その分「楽しさ」というものが大きく１週間があっという間に過ぎてしまいました。その短く感じた１週間の中で最も印象に残ったのは、木曜日の夜のプログラムでした。この日の夜のプログラムは「受難」がテーマで、最初にメル・ギブソンの「パッション」の映画の一場面を見ながら、いくつかのステーションの所に行き、受難を体験するというプログラムでした。自分にとって一番心に残り、感動し

たところは、真ん中に置いてある大きなろうそくから小さなろうそくに灯をともすというもので、これは、イエス様の復活を意味するものでした。自分が感じたことは、いままでいろいろな受難のステーションを回ってきてイエス様の苦しみ、そして、人間の犯した罪ということについて考えてきて、それは、許せないものだけれども、イエス様の復活によってそれらがすべて許されて、また、新たな希望というものが生まれたというふうに感じました。イエス様が苦難を受けて、そして、復活したというこの意味を、これからの生きていく時間の中で、もっと深く考えていきたいです。

賛美のコミュニケーション

中島しのぶ（市川教会　18歳）

キャンプが始まって数日後、昼の話し合いの内容に『一番好きな歌を発表する』と言うのがありました。私は賛美歌が凄く好きで「御名をかかげて」と言う歌が好きと言いました。タイトルを言うと、クルーの一人が「日本語で歌ってくれない？」と言ってくれました。幼いときに受けた心の傷のため人前で普通に喋れない自分だけど、彼らに頼まれて私は歌いだしました。初めは声が震えてしまったけれど、キャンプのプログラムにもある曲なので彼らもわかってくれたようで、最後には日本語の私に合わせて一緒に英語で歌ってくれました。歌い終わった後、みんなが拍手をしてくれた。その時のみんなの笑顔を見て、心の中で何かが変われた気がしました。私の語彙力では彼らの言いたいこと全てを理解することは出来なかったけど…でも、私たちは賛美歌を通して繋がることができたと感じることができました。

＊上記のしのぶさんの歌について、スタッフとして参加した星崎ポール(JELA職員)は次のように振り返ります。

「私の役割の一つに、成人リーダー会議に出席することがありました。ほとんどのリーダーがそうでしょうが、私は会議に出るより子どもたちと遊んでいたかったのです。キャンプ中盤に持たれた会議にも、私はあまり乗り気しない形で出席していました。その中でテキサス出身のアレンさんが立ち上がり、自分のクルーの話をしました。しのぶさんもそのクルーの一員でした。ワークサイトでのデボーションの時間にアレンさんは、一人ずつ好きな歌を歌おうと提案しました。みんな、曲名は言うものの、歌うことにはためらいがあるようでした。そして、しのぶさんの番が来ました。彼女は『御名をかかげて』が好きだと言い、日本語で歌いだしました。その時の情景をアレンさんは、『彼女の美しい声が私たちに祝福を与えてくれたんだ。歌を聞いているあいだ、神様がそばにいらっしゃることを感じたよ。あの歌声をみんなに聞かせたかったな』と語りました。この話を聞いてから、私はリーダー会議に出るのがおっくうではなくなりました。」

心の家を修理する

由井恵介（日吉教会　16歳）

僕は最初、家を修理すると聞いて(これを言うと失礼になるけれど)ぼろぼろの家なのだろうと思っていたのが、実際とてもきれいな家だったので少し驚きました。この家に住んでいるCeliaというおばさんはとてもいい人で親切にしてくれました。修理する必要がないくらいきれいな家だったので、その日帰って来た時にみんなと、何できれいな家なのに修理する必要があるんだろうと、話していたら佐藤先生が、家はきれいでも、そこに住んでいる人は差別されていたり他の人と交流しづらいのかもしれないよと言った事に、はっとしました。時々Celiaがすこし寂しそうな顔をしていたのをおもいだしたからです。でも、気のせいだと思ったし、そういうことを聞くのは良くないと思いました。今考えるとワークキャンプというのは実際の家を修理するだけでなく、そこに住んでいる人の心の家も直すことではないかと思います。

共に祈ってください

佐藤和宏（千葉教会牧師　スタッフ）

２週間の旅で、参加者たちはそれぞれ成長したように思う。そして、一人ひとり、永遠に続くものを建てるために歩き始めたことを確信する。長い道のりの中で、前に進めなくなるようなこともあるかもしれない。しかし、前に進めなくなったときは、立ち止まり、また座り込んで休めばよい。そして、再び歩き出せる力が与えられるときを待てばよい。歩き出せる力が与えられたときには、また歩み始めればよい。周囲のペースに惑わされず、自分のペースで行けばよい。そして、どうしても進めなくなったら、戻ってくればよい。私は、参加者一人ひとりに、そう呼びかけたい。そして、皆さんにも、彼らのために共に祈っていただきたい。彼らと最も近くにいる皆さんが、彼らの思いに耳を傾け、彼らの体験したものを共有し、彼らと共に歩むとき、それは彼らにとって何にも代えられない支えになるのである。どうか、私と共に祈っていただきたい、彼らが永遠に続くものを建てるようになるために…。

グループ・ワークキャンプ2005募集要項

以下の内容で十数名の参加者を募集します。

●派遣期間：7月26日（火）～8月9日（火）
●内容：米国ミシガン州でのホームステイと、同州Port of Muskegon Workcampへの参加
●問合せ・資料請求先：日本福音ルーテル社団（JELA）
　住所：東京都渋谷区恵比寿1-20-26　日本福音ルーテル社団　ボランティア派遣係
　電話： 03-3447-1521／email：jela@jela.or.jp
●選抜方法：2005年1月31日(月)までにJELAに申込用紙を提出した人の中から、書類選考により派遣者を決定します。申込用紙はJELAに請求するか、JELAのホームページ（www.jela.or.jp）のボランティア派遣の頁からダウンロードしてください。

＊注意事項
1.応募できるのは、2005年8月1日現在の年齢が12歳～20歳の方です。
2.キャンプはキリスト教の超教派で運営されており、一つのキャンプ地には400名前後のアメリカ人青少年とユースリーダーが集います。クリスチャンでない方も参加できます。
3.牧師ほか数名の日本人成人が現地に同行し、言語的側面と霊的側面からキャンパーをサポートします。
4.夏のキャンプですが、準備の都合上、申込の受付期限を1月31日に設定してあります。

ブラジル子ども支援

○初めてのB－2

2004年9月23日、石丸哲平兄（清水教会員）が長期ボランティアとしてブラジルに出発しました。米国福音ルーテル教会（ELCA）から派遣される短期宣教師をJ－３と呼ぶのに倣えば、日本からの初のB－2（ブラジルに2年間の意）と呼ぶことができます。ボランティアビザ取得には、実に多くの法的な書類と1年以上の時間が必要でした。ブラジル政府にとって前例のないボランティアビザの申請が、初のケースとして私たちに認められたのは画期的なことです。これにより石丸兄に2年間のブラジル滞在が可能となりました。

石丸兄は、来年１月までポルトガル語研修を受け、その後1年半余、２つの子どもの施設で奉仕活動にあたります。石丸兄のブラジルでの2年間が主によって守られ、恵みに満ちた出会いと有意義な働きが備えられるよう、どうぞ皆様のお祈りに覚えてください。

漫画とアニメの楽しさを ブラジルの子供たちに

清水教会　石丸哲平

この度JELAのブラジル・ボランティア・プログラムに参加させていただく事になりました石丸哲平です。私は以前から海外でボランティアをしてみたいという希望を持ち、青年海外協力隊の試験に２度挑戦しました。しかし不甲斐ないことに２度とも落ちてしまいました。中途半端な気持ちがいけなかったのだと思います。それなりに落ち込みましたが、そんな時に「こういうボランティアあるけれど、どう？」と声をかけて下さったのが、私が毎週日曜の朝、英語の勉強会に通っている清水教会の竹田孝一牧師でした。竹田牧師は20年前まではブラジルで宣教活動を行っており、今回のボランティアへの参加をさかんに薦めてくださいました。

一言でボランティアと言っても具体的に何をすればいいのか。よくテレビに映される貧しい村の開拓や疫病の予防、インフラの整備など。私はこうした特別な能力や資格を持っている訳ではありません。やる気が大事と言っても、いざ現地に出向いて果たしてそれだけで役に立てるのだろうか、向こうは自分に何を期待しているのだろうか…。そこの部分は意識しまいとしてもかなり悩みました。

ブラジルの情報をインターネットや様々な書籍で調べてみると、ブラジル側が日本について載せているのは「マンガ」、「アニメ」、その他古い新しいを問わず様々な日本のメディアの事ばかり。これだ！これらの楽しさ、おもしろさを施設に通う子ども達に体感してもらえたら、少なくとも麻薬に関わる生活、娯楽の無い毎日よりは充実するのではないか、と考えました。

私は子供の頃から漫画やアニメ、特撮に興味があり、大学時代には漫画研究会で会長職を務めました。日本国内ではこうしたメディアは趣味的と言うか、どちらかと言えばあまり良くないイメージがあるようですが、日本のマンガ、アニメ産業が、ブラジルに限らず世界において日本人が考えている以上に人気があることは、最近のニュースでも耳にすることです。

私が派遣される地域は南米でも有数の大都市であるサンパウロですが、貧困層の人々は明日をも知れぬ生活を送り、その日を楽しく生きるので精一杯と聞きます。もちろん子ども達も例外ではありません。ボランティアの活動場所はブラジルのルーテル教会が係わる学童保育所のような施設ですが、この環境も私の考えた活動内容に比較的合っていると思いました。私は、私の持っている経験知識を最大限生かし、子供達に娯楽の楽しさを一方的に与えるのではなく、共に体感してもらうことができればと考えています。うまくいけば日本語を知ってもらう良いチャンスにもなります。

いよいよ渡伯するにあたり、ここまで私を導いて下さった竹田牧師と、いつも私を支えて下さる清水教会の方々、そして派遣母体であるJELAに心からお礼を申しあげます。さらにこの準備期間を過ごしながら、昨年のクリスマスには受洗することができたのも大きな恵みとして感謝しています。今は期待と不安が混在していますが、主の導きに頼り、お守りを信じて行ってまいります。向こうでのレポート、帰国後の報告をどうぞ楽しみにしていて下さい。

○中学生、JELA事務局を訪問

2004年6月24日（木）、JELA事務局は、名古屋市・宝神中学校の7名の女子生徒の訪問を受けました。宝神中学校の第3学年では「国際理解」をテーマに総合的な学習を進めており、その学習の中でJELAのブラジル・プロジェクトを知り、修学旅行を利用した分散学習でJELAを訪れたのです。

訪問時間は1時間半と限られていたため、生徒たちにどんな事が知りたいのか前もって知らせてもらいました。生徒たちから寄せられた質問は、ストリートチルドレンは貧しい国や家庭からよく出てくると言われるが、先進国でも存在するのか、ストリートチルドレンはいつもどんな事をしているのか、ストリートチルドレンになって良いことはあるのか、シンナーやドラッグに手を出してしまう子はどうするのか、通りを歩いている大人たちに害を与えたりしないのか、どうやってお金を稼ぐのか、食べる物がなくなったらどうするのか、大きくなったら何になるのか、JELAのボランティアプログラムはどのような内容なのか、自分たちにできるボランティアがあるか、どうして「ルーテル社団」というネーミングなのか等、どれもとても興味深いものでした。

JELAの古川職員は、まず宗教改革者ルターと日本のルーテル教会について説明し、貧富の差の非常に大きいブラジルという国、殺される危険性の中で生きるブラジルのストリートチルドレンの特異性、貧困がもたらす様々な問題、貧しい家庭の子どもたちの日常生活等、知る限りのブラジルの子どもたちの現状を話しました。また路上生活の状況を知る良い資料として、木村ゆり著『路上の瞳―ブラジルの子どもたちと過ごした400日』をプレゼントしました。後日生徒たちからお礼状と感想文が届きました。

「私はこの訪問を通して、少しでも多くの人にストリートチルドレンの大変さや、そういう人たちがいるということを伝えたいと思っています。」S・長田

「私たちはまだストリートチルドレンについて勉強不足でした。ストリートチルドレンがいなくなることを私たちも願っています。」A・高岡

「お話しを聞いて、今ストリートチルドレンはどうしているかと考えています。いろいろなお話しを聞き、たくさん学びました。」N・飯田

「世界のストリートチルドレンは本当にかわいそうだと思い、これからも少しずつ調べていこうと思います。このことを周りの人にも伝えていきたいと思います。」M・山本

「私もストリートチルドレンのために何かできたらいいなと思いました。ビデオを見て小さい子はすごくいい笑顔するなと思いました。」A・矢毛

「ストリートチルドレンのことをとても分かりやすく教えてくださり、ありがとうございました。このことを今後に生かしていけそうです。」M・池田

「当たり前の毎日が世界の多くの子どもたちにとっては当たり前ではないと言うことが実感できました。私もストリートチルドレンの子どもたちに希望を持って生きていってほしいと思います。」S・南

お知らせ

【日本福音ルーテル社団（JELA）職員募集】

JELAは現在の働きをさらに充実発展させるため、事務職員を若干名募集します。宣教・教育・社会福祉に関する助成事業を進めるJELAの働きに興味のある方は、下記要領に従いご応募ください。

勤務地：JELAミッションセンター
（東京都渋谷区恵比寿一丁目２０番２６号）
募集職種：一般事務（経理を含む）
応募条件：
①JELAのビジョン（本ニュースレター１頁冒頭の、マタイによる福音書25章の聖句）と事業内容に共感し、共にその働きを前進させたいと願っていること。
②ある程度の英語のコミュニケーション力があること。
③コンピュータの基本ソフト（ワード、エクセル等）が使いこなせること。
④長期間勤務することが可能であること。
提出書類：
①学歴、職歴、信仰歴（クリスチャンの場合）を記した、写真添付の履 歴書
②職業観または生活信条についての800字以内の作文（ワープロ可）
③推薦書一通
提出期限：２００５年１月１０日（消印有効）
提出先：〒150-0013東京都渋谷区恵比寿1-20-26
日本福音ルーテル社団（JELA）職員募集係
結果通知：書類選考を通過した方に、面接に関する連絡を差し上げます。勤務開始時期、具体的職務内容、労働条件等については、面接時に協議します。

【新しい郵便振替用紙について】

郵便振替用紙を新しくしました。変更点が二つあります。①加入者名を「日本福音ルーテル社団」だけにしたこと、②すべてのプログラムを1枚の用紙にまとめて記載したこと、です。

通信欄の「アジア子ども支援」は、インドとバングラデシュの子どもたちを支援する「神様の子どもたち」のことです。小分類の「子ども」は、一人ひとりの子どもの健康管理や学用品提供等の支援、「学校」は学校建築等の支援、「井戸掘り」は衛生的な水を提供する井戸掘りの支援、を表します。なお、「チャイルド・スポンサーシップ」という用語について、ワールド・ビジョン・ジャパンが慈善事業についてこの用語を商標登録している事実が判明しました。混乱をさけるため、この言葉に替わるものとしてJELAは「子どもサポート」のような表現を用いるようにしています。ご理解ください。「ブラジル子ども支援」は、従来「ストリート・チルドレン献金」の加入者名で郵便振替用紙を発行していたプログラムのことです。「ボランティア派遣」は米国、インド、ブラジル等へのボランティア派遣を支えるものです。「難民支援」は、日本国内で難民申請している外国人の方々等を支援する働きを支えるものです。「その他」は、JELAの活動一般に対する支援金としてお受けするものです。

従来の振替用紙による振込も可能ですが、今後は新しい用紙に移行していきますので、新しい振替用紙をご入用の場合は、ご面倒ですが、必要枚数を示してJELAにご請求ください。皆様のご支援とご協力を感謝いたします。

JELA事務所が11月11日恵比寿に移転。

JELAは11月11日に、JR恵比寿駅東口から徒歩数分の自社ビル「ジェラ・ミッション・センター」（新築10階建）の2階に事務所を移転しました。1階は会議やコンサート・展示会など、JELAおよび様々な団体の公益活動に利用し、3階以上の賃貸マンションはJELAの公益活動を支える収入源にします。この地から神様の恵みが日本の国内外に広がってゆくようお祈りください。

献金者一覧

石井康夫／石澤とし子／石田浩子／伊東節子／岩津美祢子／宇五十鈴／江澤妙子／沖縄ルーテル教会CS／乙守ミチ子／柿沢純江／加藤三枝子／河波田絹子／上窪松子／河合英子／清田純次／京谷信代／釧路教会／窪田銈子／窪田春枝／神水幼稚園／古財克成／小坂敦子／斉藤正恵／沢洋子／三五康子／霜尾閑子／下関教会婦人会／周田裕芳／白髭市十郎／尻無浜紀美子／杉浦りえ／関本憲宏／高橋寿子／高橋安子／高橋佳子／田中美紗子／谷川陽子／玉名教会(担当：中島)／柘植春子／辻昭子／堤重敏・和子／東郷優子／戸田修司／鳥居和代／中村雍子／名古屋めぐみ教会（担当：鳥飼豊子）／仁保成子／芳賀明子／橋本勢津子／早瀬康平／原口恵子／パーソン・デビッド＆奈穂子／ハルボーセン美智代／バンデルタング・エリ子／平林洋子／福田陽子／藤井浩・礼子／藤井冨紗子／渕田康穂／古川文江／ボーマン・ベルニダ／松隈貞雄／松嶋俊介／松田美智子／丸山正昭／南谷なほみ／宮田幸恵／武藤康子／迎恒夫／森保宏／吉田員子／渡辺映子／渡辺高伸／渡辺聡／他に匿名2名

Augustana Lutheran Church／Central Lutheran Church／Chell, Marvin／Christ's Lutheran Church／Concordia Lutheran Church／Cunningham, Robert／Dale, Kenneth／Dinks, Catherine／Donohoe, Marthalee／Good Shepherd Lutheran Church／Grace Lutheran Church／Holte, Roselyn／Keen, Robert／Martin, Dena／McFarland Lutheran Church／Olia, James／Rasmussen, Peter／Reformation Lutheran Church／Reiland, Kathleen／Springdale Lutheran Church／St. Philip the Deacon Lutheran Church／Trinity Evangelical Lutheran Church／Waterman, Joanna／Wean, Randy／

（2004年6月1日～2004年9月30日 敬称略）

編集後記

クリスマスが近づいてきました。5、6年前に娘の保育園のクリスマス会で聞いた歌が忘れられません。「なんにもプレゼントなくっても、あなたに素敵なプレゼント、神様がひとり子を与えられた、クリスマスおめでとう、ハレルヤ！／あなたの心にイエス様が、この夜お生まれなさったら、素晴らしい、すばらしいクリスマス、クリスマスおめでとう、ハレルヤ！」。イエス様が私自身の心に生まれてくださった22年前のことを思いおこすとき、感謝の気持ちが満ちあふれ、胸が熱くなります。本当のクリスマスを知らない人に、今年こそ、それが訪れますように。（M）

JELA
Japan Evangelical Lutheran Association
日本福音ルーテル社団
〒150-0013 東京都渋谷区恵比寿1-20-26
Tel. 03-3447-1521 Fax.03-3447-1523 jela@jela.or.jp www.jela.or.jp

再生紙使用